



ぶどう畑の愛の歌

わたしがぶどう畑のためになすべきことで、何か、しなかったことがまだあるというのか。わたしは良いぶどうが実るのを待ったのに、なぜ、酸っぱいぶどうが実ったのか。

(イザヤ書5章4節)

イザヤ書5章1節から7節までの歌に登場するぶどう畑の主人というのは、主なる神様をたとえたものです。

中近東でぶどう畑を作るには、日当たりが良く、地味の肥えた場所を選ぶことから始まります。斜面を階段式に削って石を取り除きます。ぶどう畑の周りには、泥棒やキツネなどの侵入を防ぐため、石垣をめぐらし、さらに見張りの塔を建てます。収穫されたぶどうは酒ぶねに山のように積まれます。たくさんのぶどうを石または足で踏んで、汁をしぼりとると、それが良いぶどう酒のもとになるのです。

ただし、この歌はぶどうの栽培法を教えているわけではありません。神と人間との関係、具体的には神が世界の諸民族の中からただ一つ選んだ神の民、イスラエル民族との関係を語っているのです。

神がイスラエルの民を丹精込めて育てたおかげで、その国は栄えて、最盛期を迎えました。けれども、それは長くは続きません。「しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。」ぶどう畑の主人が期待を込めて育てあげたぶどうは、とても商品にならない酸っぱいぶどうでしかなかったのです。

ぶどうの木というのは細く、なよなよとしていて、木材としての使い道は、燃やす以外、ほとんどありません。ぶどうの木に価値があるのは、一つひとつが宝石にもたとえられる実を結ぶからです。しかし、ここには酸っぱいぶどうしかならず、そして、その責任はぶどう畑の主人にはありません。神様としては「お前たちの先祖を導きだしたのは誰なのか、私はエジプトで奴隷の民であったお前たちを助け出したではないか、十戒を授けたではないか、あらゆる障害を打ち破って、約束の地

2021年4月発行

に導き入れたではないか、また神を畏れる王を立てて、イスラエルに、まわりの国々を従わせるほどの栄光を与えたではないか」となるでしょう。

「ああ、それなのにお前たちはなぜ、私から離れようとするのか。私から離れることが自由の証しなのか。なぜお前たちは自分の利益のために隣人を貧窮のどん底に突き落とすことをやめないのか。」

ここに至って、ぶどう畑の主人の腹は決まりました。石垣を崩して、泥棒や野生動物を自由に出入りさせるのです。ぶどうの木は剪定されずに放っておかれます。その上、主人は雨を降らせないので、ぶどうの木は枯れてしまうでしょう。

このことが神の民の歴史の中で具体的にどう現わされたかと言うと、神がご自分の民の守り神であることを放棄されて、なんと獐狂なことで知られる外国（アッシリア）の軍隊を引き入れて、ご自分の民を征服させるということでした。神の怒りがあまりにも激しかった、その結果ですが、しかし、それにも関わらず、ぶどう畑を歌った歌は、「ぶどう畑の愛の歌」なのです。

主人が丹精を込めてつくりあげたぶどう畑は見るも無残なありさまになってしまいました。けれども、ぶどうが絶滅してしまったわけではありません。

イエス・キリストは十字架につけられる前の晩、弟子たちにこう言われました。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」(ヨハネ15:5)。

神の怒りを受けたあともかろうじて生き続けたぶどうの群れに、天からまことのぶどうの木が与えられました。イエス・キリストこそまことのぶどうの木であり、私たち一人ひとりはその枝なのです。

(2021年2月2日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊